

氏名(本籍)	おくむら たかあき (宮崎県)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博乙第2531号
学位授与年月日	平成23年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	美術教育における相互行為分析の視座 - 状況的学習論を基にした相互行為分析による指導法の改善 -
主査	筑波大学教授 博士(芸術学) 岡崎 昭夫
副査	筑波大学教授 博士(芸術学) 守屋 正彦
副査	筑波大学准教授 博士(芸術学) 直江 俊雄
副査	筑波大学准教授 博士(芸術学) 石崎 和宏

論文の内容の要旨

(目的)

これまでの美術教育では子どもの作品の表現的性質や造形的特徴に関する研究は多くなされてきたが、子どもが作品制作をする過程についての研究は比較的少ない。本論文は相互行為分析を美術教育における子どもの作品制作過程を解明する有用な方法論として提示することを目的としている。

(対象と方法)

本論文は、相互行為分析それ自体を研究対象とし、その理論と実際を関連書籍による文献研究と子どもの造形活動に関する事例研究という二つの方法を通して美術教育研究に適用しようとしたものである。

相互行為分析は、知識とは社会的状況の所産で、検証できる観察こそが分析の基盤になるという前提から、人と人や人と物とのあらゆる相互作用に関する経験的研究に用いられる学際的方法の一つであり、ある状況下における人間の会話、非言語的相互作用、人工物やテクノロジーの使用などの諸活動をビデオ映像で観察者の視点から分析することにより、そうした状況下における人間の日常活動の意味、ものや道具などの人工物の役割、人間の概念や規則を検証し、それらの問題点を見出すとともに、その解決への資源をも提供する。

(結果)

序章では、本論文の目的を示し、相互行為分析という研究方法を概観し、美術教育における先行研究を検討している。

第1章「美術教育における相互行為分析の可能性」では、相互行為分析を美術教育に導入することで問題解決への教育的資源を多角的に把握することが可能となることを主張している。

第2章「相互行為分析という視座と美術教育」では、相互行為分析の理論的枠組みやその方法について検討し、美術教育において相互行為分析をどのようにすればよいかを、幼児と保育者の会話を中心とした相互行為によって新しい色の発見がなされる過程を示して、確証している。

第3章「状況に埋め込まれた学習という視点」では、人と人との関係や役割構成について考察し、階層のない状況下で教えたり教えられたりする即興的な役割交代の重要性を見出し、学習という状況下での子どもの

造形活動にも、個人の自己表現というよりは、自然に役割を転換して相互に問題解決への教育的資源を作り出すような社会的な実践が存在することを明らかにしている。

第4章「子どもと道具」では、人と道具の関係が感覚や身体のみならず社会や文化によって成立しているという認識から、子どもの道具の使用は子ども同士や子どもと道具という間で相互行為が行われている社会的な実践であることを金槌の使用の事例を通して示している。

第5章「資源としてのプランと状況的行為」では、プランとは実践の資源としてある一つの場面状況で運用され、一連の行為を組織的に理解させるツールであるという先行研究に基づいて、教師のプランから始まり一人の子どものプランやさらには多数の子どものプランまでが幾層にも重なり合うような、子どもの制作活動における相互構成的な展開を、幼児や中学生の事例を通して実証している。

第6章「多層に重なり合う関係的な視点」では、美術教育の研究において相互行為分析を行うための視点として独自の5層構造のモデルを提唱している。それらは、1層「子どもという見方」、2層「子どもと材料・道具の関係」、3層「子どもと指導計画の関係」、4層「子どもと学習環境の関係」、5層「観察者の視点」であり、これらの視点を採用すれば子どもの行為を客観的に分析できることを述べている。

第7章「相互行為分析の手がかり」では、美術教育の研究において相互行為分析を行うための手がかりとして子どもの「視線」「姿勢」「動き」「役割」を取り出し、これらの手がかりから子どもの立場にそって5層構造のモデルと関連づけながら相互行為分析をすると、指導法の改善に寄与するとしている。

第8章「相互行為分析的な作品の見方」では、相互行為分析の人工物に対する関係的な視点を子どもの作品に応用し、作品に「近づいて見る」「順番をたどる」「理由を考える」という見方を設定することで、作品に示されている事実とそれに関する解釈を通して制作活動の過程や子どもの発想が把握できることを指摘している。

終章では、以上の各章の内容を要約し、相互行為分析を美術教育における子どもの作品制作過程を解明する有用な方法論として提示できたという結論が示され、この方法論の有用性をさらに多くの美術教育の学習場面において検証することを表明している。

(考察)

本論文は、子どもの造形活動を、子ども独自の自己表現活動ではなく、人・道具・プラン・役割・教師・教室などが重層的に関わり合い、子どもをめぐる教育的な資源の諸関係の展開を通して生成される社会的実践として見なしている。こうした子どもの造形活動を相互行為分析によって解明するため、実際の授業研究に適用できる5層構造をモデル化して相互行為分析の視点を明らかにし、子どもの視線や姿勢、動きや役割を手がかりに相互行為分析を行うという方法論を本論文は提唱している。子どもの造形活動とは社会的に秩序化された実践であり、そうした実践と材料や用具、指導計画や学習環境など多様な教育的資源との関係が明らかになれば、今までの美術教育の指導法に変革を起こすことが予想される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、相互行為分析が子どもの作品制作の造形過程を解明する分析的な視点を提供できるという仮説に立って、相互行為分析に関する理論や事例の検討を通して相互行為分析を美術教育の研究方法として導入し、造形活動過程への相互行為分析の適用を通して美術教育における相互行為分析の視点と手がかりを見出した。これらの視点と手がかりに基づいて美術教育研究の領域に適用可能な相互行為分析の方法論を新たに提案したことは、有用な信頼性のある結論として認められ、学術的意義を有した独自の研究として高く評価された。著者の方法論が今後広く採用されるようになるならば、美術教育の領域の学術進展に寄与する研究の発展が期待できる。

論文審査ならびに審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。